

# “生活者”にとっての“意味”と“思い”からの再構成を

—新たな“人の間（あいだ）づくり”のために—

馬居 政幸

1 金甫空港を守る若い兵士

今年の二月、私は学生とともに韓国を訪れた。目的は友人の宋在鴻先生が勤める大田（テジョン）市の梧井（オジョン）中学校と宋先生の母校の公州師範大学との交流。その帰国日の朝、名古屋空港行きのJALに乗るためにソウルの金甫空港に着いた私達を待っていたのは、自動小銃をもった兵士。学生とほぼ同年齢と思われた。ソウル在住ガイド歴十五年の祭（チェ）さんが「こんなこと始めて」と驚きつつ慎重に先導してくれた。私も訪韓は五度目だったが始めての経験。空港へのバスの中で昨晩までの出来事を賑やかに語って（騒いで？）いた学生達も、急に借りてきた猫のようになって兵士の間をぬけて祭さんの後を追った。

もっとも、兵士が守っていたのは入口のみで空港の中は従来どおり。祭さんと再開を約束してジャンボ機に乗り込んだ。ところが上空に上がるととも

に始まった前夜七時のNHKテレビニュースに、見覚えのあるシーンが映った。（日本の時間と情報の流れに遅れないようにとのJALのサービスなのか、救命用具の案内の後に放映）軍用機の前で若い女性がパイロットに花束を贈る傍らで子どもを抱いた母親らしい女性が泣いているシーン。昨夜ホテルで見たKBSのニュースと同じ映像だった。ただし、ハンゲル語は片言の挨拶のみの私は、意味不明のまま見過ごしていた。それがNHKのアナウンサーの声から、湾岸戦争のために韓国軍の輸送機が飛び立つ際に行われた儀式と兵士を見送る家族の別れのシーンであることがわかった。さらにその輸送機が、私達が四日前に金甫空港に向けて名古屋空港（小牧）を発つ時に、ジャンボ機の窓から見た自衛隊の輸送機と同型であることに気が付いた。

空港の兵士。機内のニュース。ホテルのニュース。小牧基地の輸送機。そ

こういう熱源という認識があるならば、早急に有効利用を進めてほしい。そのことが環境にとっても、人間にとってもよいことだからである。

十一月二十日

磯野 央子

今日、夕方六時から、6チャンネルで放送している「ニュースの森」を見ていたら、次のようなことを聞いていたので、それについて考えてみることにしました。

どんなことをいつていたかということ、ごみについての事でした。

この大量のごみが、小指の二関節目くらいの大きさの燃料になる、というのです。

燃料といっても、とう油の半分ほどの燃料ですが、たったそれだけでも、今の日本にとっては大切なことです。

ごみを収集するまでは、今までと

同じなのですが、ごみを収集し、それを三段階にわけ、こなごなにしましたものが、その燃料なわけです。ごみをもやして、その熱を温水プールに使うことなど、固型燃料はこれからも役立つくれるそうです。

製造元では、一キログラムを十円（二十円ぐらいで売りたいと思っています）。

でも、わたしは、役に立つものだったから、もっと高値がついてもおかしくはないと思います。

このようなことを、もっともっと発達させて、住みやすい、よい日本にしていくために、わたしもがんばろうと思いました。

子どもたちも、ニュースや新聞にも気をつけて、環境問題を考えようとしている。

授業というものは不思議なもので、

ちょっとあつかっただけなのに、目が開け、そのことが見えるようになるものである。トビツク的でも授業でとりあげていくことが大切である。

### ■P130の答

- 1) むかって左の方向に進もうとしている
- 2) 船・イギリス 海・日本人とインド人
- 3) この間が討論を生み出させるものになる。船という意見と旗（国懸）という意見が出るのである。
- 4) イギリスをしめしているのであるが、この絵では、はっきりとユニオンジャックを隠している。ピゴーは暗にイギリスを批判しているのである。
- 5) ピゴーはフランス人である。根っからの親日派で日本人の女性を妻にしている。このルマントン号事件の風刺画はピゴーが、イギリスのとった態度について批判したものである。不平等条約をたてて日本人に対してイギリスの横暴さを船長の指先にこめている。

◆ピゴーの描いた鹿鳴館の絵は、日本人が洋装に身をまとい、舞踏会に出掛ける姿をあらわしているが、鏡の中の姿は猿である。これを、ピゴーは、猿芝居と表現している。つまり、ピゴーはこの絵を通して、日本のとった欧化政策の短絡さを批判しているのである。

の関係が見えてくるにしたがい、私の胸に、「ああ、またか！」という思いと五年前の苦い経験が蘇ってきた。

## 2 日本は私達の犠牲で豊かに

私は昭和六年正月に静岡県青年の船の講師として、始めて韓国(釜山)を訪れた。中国の青島市訪問後の寄港のため、僅か一泊二日の滞在であったが、半島とその先に連なる列島という最も近い国に住む、人と人の間(あいだ)にある溝が、いかに深く埋めたいものかを感じ取ることができた貴重な旅であった。特に、釜山の国連墓地で聞いた次の言葉は私の「社会学」観を根底から揺さぶった。

「ここは六・二五動乱の時に韓国を助けに来てくれて亡くなった恩人の墓地です。あそこに立っている旗の国の人達です……日本は来ませんでした……日本が高度成長できたのは私達の犠牲があったからです……」

通訳の女性の言葉である。私には特

別に反日感情をもった方ではなく、五十才前後の温厚な韓国の女性と思われる。だが、通常の名所旧跡の見学と同様に記念撮影の場を求めて墓地の中を無遠慮にうろつく日本の若者の姿を見て、日頃の思いを語らずにおれなかったのか。その声は静かではあるが厳しく問い掛ける響きであった。しかし私は、最初彼女の言葉の意味を理解できなかった。私自身の朝鮮戦争と余りにも異なっていたためである。彼女には私の理解する朝鮮戦争という歴史的事実は存在しない、といった方が正確だったかもしれない。

私にとって朝鮮戦争は、社会主義・共産主義に基づく中華人民共和国やソビエト連邦の軍に支えられた朝鮮民主主義人民共和国と、自由主義・資本主義に基づくアメリカ合衆国を中心とする国連軍に支えられた大韓民国が、北緯三八度線を境に行った戦争。ドイツの分裂と共に、ソ連と米国の二つ

の超大国による第二次大戦後の「世界秩序を決定づける戦い」、という位置づけであった。また日本の戦後史の通説では、この戦争に前後して米軍の占領政策が変更。いわゆる「逆コース」と総称される時代に入り、その象徴が世論の反対の中で設置された自衛隊の前進の警察予備隊、とされる。

したがって、この戦争を契機に生まれた自衛隊を憲法違反と位置づけ、反戦平和を主張する論者は多い。だが、韓国の人達を救いに行かなかったという視点から日本の戦後史を問う言葉に私は出会ったことはなかった。

しかし彼女にとってこの戦いは、一九五〇年六月二十五日に北からの戦車が三八度線を越えたことにより始まり、三〇〇万の人命と人口の四分の一にあたる一〇〇〇万を越す人達の家族が離散する犠牲を払って、韓国が「国家の存亡をかけて戦った内戦」であった。国連軍として参加した国の人々は、自

らの犠牲を省みず助けてくれた恩人。日本は犠牲を払わずに獲得した経済的利益をもとに高度成長への道を進むことによって豊かになった国である。

もっとも彼女の意図は、日本が国連軍に参加すべきであったということではないであろう。日本の再軍備を最も厳しく非難してきたのが韓国の人達である。無頓着に墓地を歩く日本の若者を見て、日本の豊かさが誰を犠牲にして獲得したものかを自覚しないことへの憤りから出たもの、と考える。

ただし、このように彼女の言葉の意味を推し量ることができるようになったのは後のこと。その時は、頭が混乱し返す言葉がなかった。本来ならば、占領下にある敗戦国日本が国連軍に参加できるわけがなかったと反論(いいわけ?)し、日本の平和主義を主張すべきだったかもしれない。だが、砲弾の中を逃げまどった彼女の思いに勝る論理を、今なお私は持つことができない。

い。その意味で、彼女の歴史解釈がどうであれ、彼女の言葉は、私の朝鮮戦争観や半島に住む人達への関心、さらにはその前提の社会(科学)認識のあり方の問題に気付かせてくれた。

## 3 通訳の女性の言葉に学んだこと

まず一つは朝鮮戦争の捉え方。社会主義と資本主義という体制間の対立として位置づける視点が、どれほど戦場となった半島の人々の生活世界を無視することであったか。このような認識は、社会主義・資本主義いずれの立場に立とうと、また客観的で精緻な論理構成であればあるほど、朝鮮特需を浮揚力として東西の冷戦の狭間で高度経済成長を可能にした日本という国家の枠の中の社会で生活する自身の現状(位置)を正当化する歴史・社会認識としての役割を果たす(これがイデオロギーの意味)、からである。

問題は戦争の原因でも正当性でもない。一九五〇年に半島で生じた戦争の

意味を捉える際に、彼女の言葉の背後にある戦火で破壊された人々の生活にあっての意味と、その五年前の戦争による破壊を復興できた列島に住む人々の生活にあっての意味とを比較・関連づけたかどうか。またこのことは、朝鮮戦争や戦後史のみではなく、古代以来の半島と列島に住む人達相互の関係を、「生活者にとっての意味」という視点から捉え直す必要があることを示唆していると考ええる。

その二つは社会認識の方法の限界。社会主義、資本主義のいずれにせよ体制の相違に歴史的社會事象の認識を還元する方法である限り、戦争は人々の命を奪い生活を破壊する、という生活者の常識を見失うということ。さらにこのことは、客観性、普遍性を重んじる科学的方法の手順を踏む限り避けられない限界でもあると考ええる。

科学的社會認識の方法を追求する限り、戦争による破壊を数量的に示し、

原因や影響を合理的・論理的に説明することはできて、そこで離散した人達の思い自体を表現することはできない。それは非合理で特殊的・個別的なもの。肉親の死の悲しみを、敵を殺す行動にも、生き抜く勇氣にも変えられないのが人間。科学の目で見れるのは、一定の社会的状況の元で取りうる様々な選択肢とその条件、あるいは意思決定の確率論的傾向。個々の選択主体固有の悲しみや怒りの深さではない。

通訳の女性の思いの理解は、科学的認識の問題ではなく私自身の他者理解の深さの問題である。科学的認識はそれを磨くための一つの手段であっても全てではない。もし全てとして位置づけるならば、そのこと自体が他者の理解を妨げる要因となろう。

そして私にとって「社会がわかる」とは、先の「生活者にとっての意味」と、この「生活者の思い」の理解にかかわるもの。社会の合理的・普遍的理

解は研究者の目的であって、生活者には一つの情報にすぎないからである。

だが問題はここから始まる。このように指摘する私自身はあくまで「見る側」であり「意味づける側」にいる。朝鮮戦争や過去の半島と列島の関係に對する「認識主体」ではあるが、その中で「生きる主体」ではない。だが今年二月の名古屋空港に向かうジャンボ機での経験の意味は異なつた。

釜山での通訳の女性の言葉への私の反省は、あくまで私自身の社会の捉え方の問題であつた。だがもし金浦空港を守る兵士や子供を抱く母親に、同様に問われたら私はどう答えたか。

日本も派遣(兵)するといえ、かつての侵略に基づく新たな危惧の言葉が、逆に平和主義を主張すれば、再び日本は私達を犠牲にするのか、と非難の言葉が返ってきたかもしれない。何よりも日本ではなくあなたはどうするか、と問われた場合の答えは。

#### 4 脱イデオロギーの意味

湾岸戦争は偶発事件ではない。脱イデオロギーの時代故に生じたもの。その中で日本が問われたのは、GNP個人比世界一、世界の富みの15%を有する経済大国として世界の再秩序化のために何をするか。東西対立の狭間で米國に依存しつつ自國の貧しさを理由に経済的利益を追う道は断られた。

脱イデオロギーの時代とは、世界がイデオロギーの呪縛から解放され、理想社会が実現したのではない。単に、既存のイデオロギーでは秩序を維持できなくなつたことを意味するにすぎない。かつてD・ベル等により一九六〇年代にイデオロギーの終焉と両体制の収斂理論が提起された。共産主義や資本主義というイデオロギーに代わり、科学(K・ポッパの反証可能なピースミール・サイエンス)のみが人類の未来を築く、という論理である。だがこのような科学観の誤りは國運葬地であ

の言葉で明らか。科学への信仰もまた一つのイデオロギーとなる。

人間は世界と社会を「ありのまま」ではなく、習慣や信仰あるいは科学や学問などの「概念装置」というレンズを通してしか認識できない。したがってレンズの種類により無限に変化するのが人間の社会認識の特性である。そのため、①多様性を否定し単一の世界観に統合するか、②多様性を前提に個性的な認識を育成するか、社会認識の教育の最重要課題となる。そして、複数の①の立場が世界と社会の支配をめぐり対立するときにイデオロギーが生まれる。イデオロギーとはアマゴークやプロバガンダではなく、「特定集団の利害を正当化するための信念や論理の体系」だからである。

しかし湾岸戦争をはさむ世界の激変は、①では今後の世界のあるべき方向を描くことができず、②の立場から多様な国や民族や社会や文化が多様なま

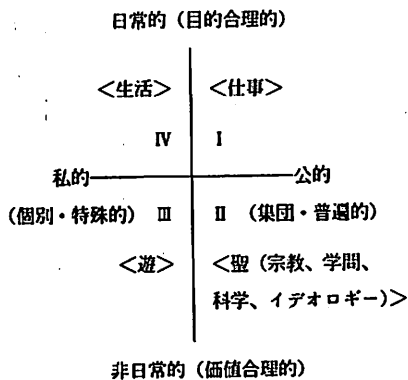
まに「共に生きる道」を創造しなければならぬことを示した。その問題を解く舞台に、日本も上がらなければならぬ。だが日本にとってより困難な問題は、単一民族・言語(の文化・イデオロギー)を前提に同質性を重視してきた自國の中の世界を、異質性を重視に転換することではないか。一人ひとりが「互いの違いを認めつつ共に生きる方法」を日常生活の中に創造しなければならぬのである。これが日本とそこに籍を置く者にとっての脱イデオロギーの意味である。

そしてこれこそ社会科教育の真価が問われる舞台であるはず。

理由は社会科こそ戦争への反省に基づき、②の立場から学習者個々の日常に即して生活を創造するために新設された教科であつたからである。だが実際には、①の立場からの多様な社会科論が、互いに正当性を主張し対立することはあつても、学校の外や卒業後も

含めた学習者自身の多様な生活にとつての意味をどれほど重視してきたか。学習者は、①の知識を教えられる容器か、教師や研究者にとつての理想的子ども像(これも①)のラベリングの対象として捉えられてこなかったか。

#### 5 “人の間(あいだ)づくり”を



この図は社会科が対象とする社会的世界の領域を、「日常的—非日常的」「私的—公的」という二つの分析軸で四種に分類したものである。

◆下の図を見て、次のことを考えましょう。



◆自分たちが住んでいる土地とよくにているところ。

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )

◆自分たちの住んでいる土地とちがうところ。

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )

これまで社会科学は、ⅢとⅣの領域を軽視（無視・否定？）し、Ⅰとその正当化のためのⅡの領域の“知識”を教え、その理解（記憶？）度を“社会がわかる”基準としてこなかったか。

公的なⅠとⅡには、文字通り公（おおよけ）に誰もが認める“正解”が必ずある。しかもⅡはその“正義”を証明する。まさに学校で“教える知識”は“正しく善”。理解（記憶？）しない学習者は“誤りで悪”となる。

だがⅠとⅡがどうであれ、Ⅳの生活は存在し続けなければならない。Ⅲの遊びも人類史とともにある。それに対して、ⅠとⅡの歴史は、戦争に敗れて後の四十年。せいぜい遡ってヨーロッパ近代明治の文明開化。脱イデオロギーはⅠとⅡの問題にすぎない。

ただし、私的な生活と遊びの領域であるⅢとⅣの答えは複数で曖昧。相手により異なる場合も多々ある。おまけにその基準は、Ⅲは“楽しさ”、Ⅳは

“幸せ”といった“主観的”なもの。またこの領域の特色は“知る”だけでは価値がないこと。具体的に個別的な“生きる場”における様々な“ヒト、モノ、コト”との“間（あいだ）”で“駆使”される過程において、その意味と価値は創られる。教室で教師が強いて勤（勉）めさせても無意味。“知ること”と“できること”の“間（あいだ）”にある溝は、科学的知識の追求のみでは埋められない。

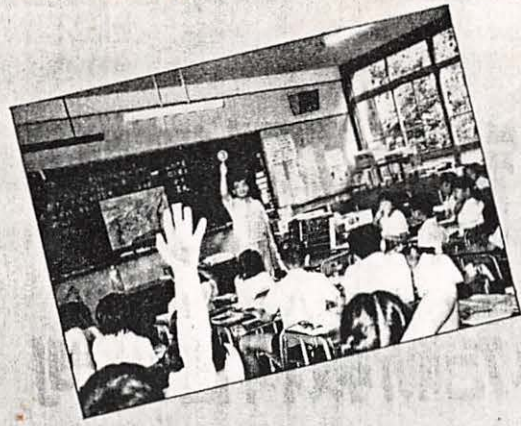
釜山でのとまどいは、通訳の女性のⅣからの問いに私のⅠとⅡが答えられなかったから。ジャンボ機上では、若い兵士と母親のⅣへの答えを私のⅣが見出せなかったことによる。だがⅣである以上、その答えは兵士や母親にもない。私と彼や彼女との“あいだ”に創造するものだからである。

本来一人ひとりの生活を豊かにする手段がⅠとⅡであるはず。だが豊かさを追求する過程でⅠとⅡが自己目的化

しなかったか。その結果が、湾岸戦争、経済摩擦、外国人労働者、男女共同参画型社会……にとまどう現代日本の社会状況ではないか。その責任を社会科学もまた免れないと考える。

今必要なのは本来の目的であるⅣ、すなわち“生活者にとっての意味”から公的なⅠとⅡを再構成すること。そのためには、特定の研究者の理論や外国の書物に一元的な正解を求めるのではなく（脱イデオロギーのもう一つの意味）、多種多様な“生活者の思い”の“あいだ”に問いと答えを創造し続けるしかない。そしてその基盤は、どのような人とも“コミュニケーションの網目（ネットワーク）”を張ることのできる主体の育成。すなわち“人の間（あいだ）”を創る“ことのできる力（智恵？）”の育成こそ、私は“社会がわかる”ための第一歩だと考える。

〈静岡大学教育学部助教〉



茂松清志（高知大学教育学部附属小学校）の授業

特集

アイデア作業学習で表現力を鍛える

ミニ討論・作業学習にゲームソフトの新メニュー?

提案 社会科教科書はゲームソフトシミュレーションに勝てるか 依原 正仁 五  
 勝てそうにない!! ではどうする!?

意見

勝負は無意味! めざすべきは授業の「再開発」 小西 正雄 二  
 勝負はゆくえ知れずだ 多田 俊文 四  
 教師の役割が問われている 谷川 彰英 六  
 「援軍」という発想では、勝てない 二杉 孝司 八

● 表現力を鍛える作業学習の工夫例

- 絵地図づくり・いろいろ工夫例 戸井 和彦 三
- イラスト化・いろいろ工夫例 川北 孝徳 六
- 統計づくり・いろいろ工夫例 池田 俊男 三
- カルタづくり・いろいろ工夫例 中村 哲治 三
- スゴクづくり・いろいろ工夫例 鎌田 昇 四
- 歴史年表づくり・いろいろ工夫例 本間 昇 四
- 子どもの日常感覚を入れた作業学習の新メニュー
- インタビュウの技法・ここがポイント 内海 俊行 四
- マンガ化の技法・ここがポイント 福山 憲市 四
- 劇づくりの技法・ここがポイント 山本 順治 五
- 放送番組づくりの技法・ここがポイント 河内 澄子 五
- ビデオづくりの技法・ここがポイント 小森 啓子 六
- PRポスターづくりの技法・ここがポイント 大河内 義雄 六
- クイズづくりの技法・ここがポイント 横田 裕二 六
- ゲームづくりの技法・ここがポイント 久永 誠人 七
- 誌上旅行プランづくりの技法・ここがポイント 染谷 行宏 七
- 表現活動とノート指導・いろいろ工夫例
- 見たことノートの指導・いろいろ工夫例 有田 和正 八

- 聞いたことノートの指導・いろいろ工夫例 松野 孝雄 三
- 調べたことノートの指導・いろいろ工夫例 樋口 則明 三
- 気づいたことノートの指導・いろいろ工夫例 山田 雅光 六
- 話し合ったことノートの指導・いろいろ工夫例 渡部 一敬 六
- 感想文のまとめ方・いろいろ工夫例 山田 一敬 六
- モノづくりを授業に入れる・いろいろ工夫例
- 小3 この単元でこんなモノづくりを! 安部 淳子 三
- 小4 この単元でこんなモノづくりを! 足立 正弘 六
- 小5 この単元でこんなモノづくりを! 松島 欣也 六
- 小6 この単元でこんなモノづくりを! 書川 啓一 六
- 中学 この単元でこんなモノづくりを! 我妻 孝治 三
- 肥沼 孝治 三

作業学習で活躍する面白カードの工夫

- 調べカードの工夫・いろいろ例 宮崎 早予子 二〇四
- 観察カードの工夫・いろいろ例 高山 佳己 二〇六
- まとめの絵カードの工夫・いろいろ例 松本 明 二〇八

連載講座

- 「環境問題」その授業化 9 有田 和正 二三
- 「増えるこみ」の利用法を考える 9 馬居 政幸 二九
- 「社会がわかる」とは何か—脱イデオロギー時代の次に来るもの 9
- 「生活者」といつの「意味」と「思い」からの再構成を 村上 浩一 二二〇
- 新たな人々の間—あいたぐりのために——
- 社会科授業に使える「モノ」情報 9
- 道具論 村上 浩一 二二〇

今月の自序

- 3年 ちがった土地 中地 強 中学地理 答のあるクロスワード 中西 真
- 4年 日本No2は? 金川 秀人 中学歴史 ノルマントン号事件を推理する 村井 俊之
- 5年 あなたは陶工になれるか 尾関 麻生 中学公民 ムーミン谷のブッシュ大統領 永野 広務
- 6年 スケルトンパズルII 佐藤 仁
- 表紙写真・モンテ・屏・須田 尚 / イラスト・飯島 英明 / 表2授業に使える1枚の自作写真・横山 尤子
- 表3今月の教材単元一覧 / 裏表紙写真・田中 力